

挑戦するなら、退路は断って捨て身になる

自分らしく生きるためのスタートは、一にも二にも行動を起こすこと。何事にも挑戦せず、うじうじ悶々と時間を過ごしていたところで何も始まりません。

「でも、挑戦して失敗したらどうしよう…」などと心配している人をよく見かけますが、私には何もしないうちからそんなことを考えている方が不遜という気がします。なぜなら失敗することを気に病むということは、「私は失敗なんてありえないほど優秀な人間だから、成功できなければ恥ずかしくて生きていられない」という、自分を買いかぶった気持ちの裏返しだからです。

特に若い内はどんなに失敗をしたところで、すべてが貴重な経験となつてそこからどんな芽が出てくるもの。最初から自分をそんな大した人間だと思わず、ダメでもととと

腹をくくつて、とにかく行動を起こし挑戦してみることが何より大切だと私は思います。

「挑戦する前から、「どうせ自分はダメに決まっている」などと諦める人もよく見かけますが、これもとてもおかしな話。人生へのダメ出しなどというものは、時が来れば試験官や神様がいやが上にもしてくれます。どうしてわざわざ、自分で自分にダメ出しをする必要があるのでしょうか。もうここまで、ここがジ・エンドと神様から言われるまでは、せめて自分ひとりくらい自分を信じてあげなければ、長い人生そうそう乗り切れるものではありません。

ただ、挑戦は誰にでも、不安と孤独が襲いかかるもの。そう一朝一夕に、エイヤツと飛び出せるものではありません。

生来、怖がりな私にとってそうだった思いは人一倍。いつも何かに挑戦する前は、あれやこれや延々と思ひ悩み七転八倒した結果、もうやはり飛ぶしか他に道は無いという、文字通り人生の崖っぷちに自分を追い詰めるまで考えに考え抜きます。ただここまで自分を追い詰めておくと、とにかく生きるか死ぬかの断崖絶壁から飛ぶわけですから、それは思い

切り飛べるし（飛べなければ落ちておしまいですから）、どこかに自分の手がかかるまでは必死で飛び続け、戦い続けるわけです。

では、飛ぶまでにどんなことを思い悩むかということ、これはいつも同じです。「自分は本当に何をしたいのか」、「どんな選択が一番自分らしいのか」、「自分が人間として最も大切にしているものは何なのか」、「自分は何のためにこの世に生かされているのだろうか」などと、そんなことをとにかく考え尽します。

するとぼんやりですが、次第に道らしきものが見えてきます。何をすべきかはすぐにわからなくとも、少なくとも何をしたら自分らしくないのかは、はっきりわかるようになっていきます。ですから、こういう生き方をしたら自分自身を偽ってしまう、自分が自分になくなってしまおうという選択は、ほとんどん除外していったら、最後まで残った最も自分らしい選択に向かつて、思い切り飛び出すわけです。

こういうプロセスで自分の挑戦への決断をする以上、「もしかすると失敗するかもしれないから、その時のための準備として他にも道を残しておく」という選択は必然的にでき

なくなりません。そう言えば、いわゆる「滑り止め」をしたという経験が、私の人生にはほとんど見当たりません。はじめての受験だった高校入試に始まり、NHKに合格したマスコミ入試、フリーランサーへの転進、パリへの移住、参議院選挙への出馬など、どれもそこで結果が出なければ路頭に迷いかねないような、安全ネットなしでの挑戦でした。

安全ネットがないので、途中で諦めたら後は墜落するだけです。だから何が何でも目的地にたどり着くまで必死に飛び続けるしか、それ以外に道がないのです。でもそうそう簡単に、良い結果が出ることはまずありません。むしろ私の挑戦は、いつも必ず大きな障害が待ち受けていて、おそらく普通ならばそこで諦めてしまうようなケースばかりだったと思います。

就職試験ではNHKから合格をもらうまで、どこからも内定はもらえませんでした。平行的に受験していた民放テレビ2社もそれぞれ5次、6次面接までコマを進めながら結局、最終選考で落ちてしまいました。もうあと一步で地獄の就職戦線から開放され合格という天国に手が届くというところで、お釈迦様のくもの糸よろしくプチンと運命の糸が切られたようで、不合格と知った時にはグシャツという音が聞こえそうなくらい思いきりへこみ

ました。でもそこで就職活動を諦めてしまったら、すべてはジ・エンド。ですからグシャツとつぶれていようがその翌日にはまた、どうにかこうにかカラ元気を振り絞って、次の試験会場に向かったわけです。

初の参院選への挑戦も、比例代表名簿で5位という順位を約束されて出馬要請をお受けしたにもかかわらず、フタを開けてみたらなんと順位は当選圏内からはるかかなたの16位。党からの公認を受けるため、もう既にキャスターとしての仕事はすべて精算してしまっていましたので、いまさら立候補を取りやめたところで、私には戻る仕事もありません。結局、当選する見込みも無いまま、当人としては誠に悲壮な覚悟で立候補したわけですが、なぜまったく勝ち目も無いのに出馬するのかと、散々マスコミからは嘲笑され揶揄されながらの選挙戦でした。

でももしあの時、何か滑り止めや生活の糧が他にあつたら、間違ひなく私は勝負を下りにいたに違いありません。自分が戦うことをやめたら、そこに待つものは死。大袈裟ですがそう思える状況まで、自分をギリギリと追い込んでゆくことが、事を為す上で最も重要

ではないでしょうか。

「退路はすべて断ち、捨て身で立ち向かう」

だからこそ火事場の馬鹿力ではありませんが、実力以上のパワーが出て勝負のツキを呼び込めたし、頑張り抜けたのではないかと思います。自分を空しくして、虚心坦懐の境地で事にあたるためにも、退路を断って捨て身になることは、私にとって絶対条件だった気がします。

世間からは、なぜそんなに悪運が強いのか、本当はよほど周到に計算をしてステップアップしているのではないかと勘ぐられたりもしますが、誰でも本当に捨て身で物事に当たれば、そこそこ思いは叶うものではないでしょうか。ただ捨て身になるまでギリギリの状況に自分自身を追い込むような人生が果たして幸せであるかどうかは、その人自身の価値観によって大きく見解が分かれるところだとは思いますが…。